

視点・論点

エクアドル世界反基地会議

次のステップへ

山口 響

三月五日から九日にかけて、南米エクアドルの地で、はじめての世界反基地会議が行われた。正確には、「外国軍基地撤廃国際ネットワーク」の設立総会という位置づけである。私は、アジア平和連合（APPA）ジャパンの一員として参加し、沖縄の三人の活動家のサポートに努めた。

はじめの三日間は首都のキトでの会議である。その構成は、昨年十一月に私たちが行った「アジア太平洋反基地東京会議」に似ていて、『季刊ピープルズ・プラン研究所』三七号参照）、前半は米軍の世界的展開の全体像の把握と各国・各地域の報告、後半は行動計画づくりにあてられた。紙幅が少ないのでいちいち説明できないが、内容面でもっとも印象に残った報告は、いわゆる「コロンビア計画」に関するもの。この計画は、名目上は麻薬撲滅をうたっているが、実際には、米軍・コロンビア政府・極右民兵組織などが結託して行っている極左運動つぶしであり、反農地改革の動きでもある。

ちなみに、内容面というよりも「ビジュアル的」に印象に残ったのは、プエルトリコのピエケス島から来たニルダ・メディナさんの報告。ほとんどメモも見ずに、大きな手振り身振りで一五分間しゃべりまくる。「さすがラテン系！」とステレオタイプで貧困な描写しか私にはできないが、彼女のエネルギーは、ピエケスから米海軍の射撃場を撤去させた運動から出てきているのであった。

さて、後半の行動計画作りについて。私は沖縄代表団の世話に手一杯であり議論を聞けなかったのであるが、世界会議ともなると、やはり共通の行動計画を策定するのはそう容易ではない。「米軍が展開している」ということ以外には互いの関連性が薄い地域も少なくないからだ。それでもなお、いくつかの重点事項が挙げられた。ひとつは、世界中の外国軍基地（そのうち九五%が米軍）に関するデータベースの作成だ。この課題は反基地ネットワ

ークの設立当初から指摘されているが、いまだに着手できていない。もう一点議論になったのは、反基地の「国際行動デー」を設けるかどうか。イラク反戦運動の世界同時行動（〇三年二月一日）を念頭に、この種の行動には人ひと力を与える潜在力があるという意見が出される一方、あくまで地元反基地運動が優先されるべきであり、一方的に設定された国際行動がそれを縛るべきではないとの見解もあった。結果として、同時行動の理念は理解するが日程については定めない、というところで落ち着いた。

こうして三日間にわたる会議を終えた次の日は、三月八日の「国際女性デーキャラバン」と称して、首都キトから米軍基地のある港町マンタまで約二時間をかけたバスの旅である。しかし、途中四か所に止まってそれぞれの町で集会を持つ予定だったが、バスが遅れに遅れて結局一か所だけに！そして最終日、マンタでまず室内集会をもち、その後、街に繰り出してよいよデモが始まる。市中心部の公園から大通りに入り、地元住民の視線を浴びながら商店街を抜けて海沿いの道路へ、そして米軍マンタ基地の正門へと到る、およそ三時間のデモを南米の灼熱の太陽の下やりきった。

この会議のひとつの大きな成果は、アジア太平洋の連帯感が増したということだ。アジア太平洋の枠でワークショップや記者会見が開かれ、簡易的な相談会も持った。米軍再編がアジア太平洋をますます関連づける中で、私たちの抵抗もつながっていくことになるだろう。

なお、エクアドル会議については、五月発行予定の『季刊ピープルズ・プラン』三八号で特集を組む。くわしくはそちらをご覧ください。

（やまぐち・ひびき／ピープルズ・プラン研究所）